

『民情一新』覚え書

——官民調和論との関係において

一

『民情一新』覚え書——官民調和論との関係において

『民情一新』は、一八七九(明治十二年、福沢が当時の彼としてはまれな集中した執筆で書き下した力作であり、その重要性は古くから注目されてきた。だが、この小さい本についての立ち入った検討は意外に少なく、またその少ない検討には一つのはっきりした対照が見られる。この本について初めて本格的に論じたのは、小泉信三の「福澤論吉の歴史観——『民情一新』と『旧藩情』」であった。小泉は永田広志が『日本唯物論史』(一九三八年)で、この本に日本における唯物史観の先駆として注目した理解の実質的延長線上で、『民情一新』を科学技術史観ないし一種の唯物史観に立った歴史観の書物としてとらえ、さらに『民情一新』に長文が引用されているロシア近代史の書物の同定を行った。

松 沢 弘 陽

その後この本についての研究は長い間現われなかったが、その空白を埋めた最近のすぐれた研究は、このような傾向と対照的に、『民情一新』を、政治的なプログラムとして、明治十四年政変前後の激動する政治的対抗状況の中でとらえる。一つは坂野潤治の「政治的自由主義の挫折——『英国化』としての『欧化』とその変質」、もう一つは伊藤彌彦の「明治十四年の政変と『人心』教導構想——福澤論吉の時代から井上毅の時代へ」(上・下)であり、「下」は坂野の研究をふまえた上で書かれている。両者はともに、『民情一新』を、一般に官民調和論として知られる福沢の政治構想との関連でとらえ、かつ、この前後を通じる彼の政治構想・政治的意見の変化に注目する。周知のように福沢は自己の「学者」『知識人』としての、政治家との役割の差異を強調しながら、同時に、そのような「学者」としての役割を通してきわめて政治的に発言・行動した。明治十四年政変前後は、その福沢が現実政治

に最も深くかわった時期であることを考えれば、『民情一新』についてのこのような研究は、きわめて大きな意味をもつといわねばならない。こうした対照的な二つの傾向に対して、丸山眞男の『文明論之概略』を読む。下巻では、『民情一新』は「直接にはやはりやや長い時間幅をとった時事論ですが、問題としては新たな原理論を含む未完の作品」であると位置づけた上、「第一級の思想的著作」と評価する。

小論では、以上のような先行研究をふまえた上で、『民情一新』について、その「文明」の原理論の側面に力点をおいて検討を試みる。その際の関心は以下のような問題である。『民情一新』における「文明」の原理論の、『文明論之概略』のそれからの連続と変化。この変化に、『民情一新』に引かれる西洋の書物がどの程度かわっているか。この変化に、西洋の書物の影響とは別な、福沢自身の同時代経験がどのようにかかわっているか。『民情一新』では「未完」ないし未完の構想が、『民情一新』と関係の深い、その後の一連の著作の中にどのように現れているか——である。『文明論之概略』は、「文明」という概念でとらえた世界史の長期の展望の光のもとに、日本の当面の国民国家形成の構想を示す企てであった。同じように『民情一新』も、「文明」の長期の見通しのもとで日本の政治制度について、福沢自身の従来の構想を修正して新しい構想を示そうとする企てだったといえよう。福沢の政治構想はつねに、「文明」論という形の彼の世界史の見通しに基礎をおいていたのである。そうだとすれば、『民情一新』における「文明」の原理論についての検討は、この書物の前後にわたる福沢の政治構想の

理解を助けるであろう。また、『民情一新』の前後を通じて、福沢の思想が変化した場合に福沢の思想のレベルがどのような意味で変わったのかを明らかにする手がかりともなるであろう。

二

『民情一新』緒言と全五章は、「世界古今、何れの社会にも行はれる、普遍的な「保守」と「進取」の分化・対立第一章から説き起して、十九世紀を通じるコミュニケーション革命の社会的影響の問題に集約し(第三章)、それを人民の反抗と政府の圧制との循環という局面に集中してとらえ(第四章)、このような十九世紀社会の原理論的な認識の上に、それに対応する政治制度の構想を示す(第五章)」という、論理的に堅固な構成をもち、十九世紀文明についての予言的な言説は斬新大胆で明快である。しかしテキストを注意深くたどってゆけば、説明が必ずしも十分ではなく、首尾一貫もしていず、また行論の構成や概念があいまいだったり整合的でなかったりする。一見明快な印象以上に複雑で、多くの未完の思想がほとんど展開されないまま各所にちりばめられているように思われる。そこで以下このような点に注意し、構成も多少組みなおして、テキスト全編の諸論点を整理してみたい。

第一——五章を書き上げた上で最後に書かれた、「緒言」は、「文明」概念の再定義から始まる。福沢は「文明」の「原因」を「社会交通の便」にしばった上で、十九世紀に入って蒸気船車・電信・郵便・印刷を生み出した、「近時文明」がコミュニケーションの革命的变化をも

たらしめたことを指摘する。このコミュニケーション革命は『民情一新』——社会全体にわたる不断の変化と、人間の意識と行動の革命的变化——をもたらした。その変化は好ましい面から好ましくない面まで多岐にわたるが、福沢が関心を集中するのは、「不平」と「騷擾」の「心波情海滔々たる」動揺である。このような結果はテクノロジーを發明し実用に供した者自身の予想をこえ、「發明者」自身にも制御不可能となつて、彼を狼狽させる。「狼狽」は『民情一新』のキイ・ワードの一つである。これが「近時文明」の特質である。福沢はその具体例として、西洋における「貧賤者の人事、次第に異常なる」現れとしての英国における「役夫の輩」の「ストライキ」の活発化に論及し、さらに英国の植民家・植民理論家 G・ウェークフィールドの『植民論』⁽³⁾から、「下民」(common people)の教育は彼らの「不平」を増すばかりであり、結果は「チャルチズム」と「ソシヤリズム」だとする一節を引用する。そして彼は、チャーティズムとソシヤリズムもフランスに流行する「社会党」の同類だと注解するのである。

「緒言」は、日本の知識人の西洋「盲信」批判をもつて結ばれる。批判の意味は二重であつた。第一に「盲信」の対象とされ日本のモデルとされるのが実は、「近時」よりも古い時代の西洋の「文明」であり、さらに西洋の「近時文明」の現実には西洋人自身が「狼狽」し「朝野共にまだ其方向を得ざる」という混迷であつて日本がモデルとするにはふさわしくない、という二重の倒錯である。

「緒言」において十九世紀「近時の文明」のアクチュアルな問題をつ

きつけた福沢は、第一章で、「世界古今、何れの社会にも」存在する「保守」と「進取」と二主義の分化という最も一般的な問題の検討から出発する。それはきわめて普遍的な事実だが、福沢は、文明未発達の「今の世界」においては、両者が「各其働を顕はし、又各一時に其働を逞ふすること能はずして、相互に軋轢し、その軋轢錬磨の際に、些少の進歩を見るものなり」という。両者の「平均」を通じる漸進的進歩、これを『民情一新』における進歩の第一命題といえよう。しかしながら進歩の原動力は、あくまで「進取」の主義である。保守の圧力がいかに強くても進取の力はそれをのりこえる。「されば、進取は積極の働にして、保守は消極の働と云はざるを得ず。実の利益は積極に在て、此利益を取るの法を緩和し又制節するは消極の働なり」。これを同じく第二命題といふことが出来よう。

なおこのような進歩の主義について福沢は、その手段について「旧物を保在し、又これを変形して、進取の取に利用す可きもの多し」という。進歩の主義を「本体」とした上で、その「方便」としては保守の主義を組み入れるという政策であり、同じく第三命題といえよう。これは『民情一新』ではその一端が示されたにとどまるが、やがて『時事小言』第一編(一八八〇年執筆)では、「資力変形の主義」として概念化されるにいたる。彼はこのような原理的認識を示した上で、「今の世界」における将来の予見能力が、限られていることから、一方では僅か「十数年」の将来を「臆測」して、相対的に有用な手段をとりいれ、他方では、進歩の政策は今日においては十分には実現出来ないから「策

を今日に建て、勝を数十年の後に期するのみ」とする。『民情一新』およびそれと緊密に結びついた著作における政治構想を理解するために、時間の展望についてのこのような考えは重要な意味をもっている。

第二章においては、多様な社会集団が、保守・進取両主義のどちらを受け入れ易いかを検討する。都会と田舎、智と愚、年少と老成人、貧と富、民と官。このうち民と官についての記述は、実際には第四章の主題を先取りしており、ここでのべられたことは、第四章で再度、よりくわしく論じられる。このような五つの社会的分化の対立項のそれぞれについて、前項の集団が進歩の主義を受け入れ易い、という福沢の見解にはとりたてて特異なものはなく、説明の必要は少ないであろう。ただそのように一見教科書的な一般論のように見えながら、このような分類は、福沢が西洋と日本における、「近時の文明」のもとの不安と騒擾との背景を対比する上で、重要な手がかりを提供する。「日本にても議論の盛なる者は、必ず居家を定めざる書生の中に多きことならん。此流の人は今後増すありて減ずる無し。其処置次第に国の事を為す可し、亦大に益を為す可し」という一節は、福沢において、無産で浮動的な「書生」層が、「近時の文明」の引き起す巨大な社会変動全体の方向を左右する、決定的な社会層として見られていたことを示唆する。この点については第四章の検討の中でまたふれたい。

文明の進歩における進取と保守とについてのこのような検討の上で、第三章にいたって、「緒言」において予告されていた「近時の文明」、十九世紀の文明の「利器」とその効果の問題にふみこむ。ここでは、

議論は、「古」から「近代」にいたる自然科学上の理論と応用技術の発明発見の中から、「其實用」(傍点松沢、以下同様)において、「社会の全面に直接の影響をおよぼし」、「人類肉体の禍福のみならず、其内部の精神を動かして、智徳の有様をも一変」した「利器」の最たるものとして、蒸気船・蒸気車、電信・印刷・郵便、つまり広義のコミュニケーション技術の五つをとりあげる。興味深いのは、前三者と後二者(具体的には、新聞・雑誌と郵便)とを、前三者を物と人との輸送・流通にかかわる技術、後二者を情報――福沢は「インフォメーション」ということばを使う――の伝播にかかわる技術として区別し、その「功德」の評価について微妙にちがいが見られることである。蒸気船車と電信は、経済(商品流通の促進と統一市場の拡大)、軍事・政治行政など、社会諸領域をまきこんで「世界の全面を一変」する影響の広がりにおいてとらえられている。その上でその深刻な影響の評価においては、「人を貧にし、人を富まし、人を智にし、人を愚にし、甚しきは人を生かし、国を興し、国を滅すことあり」と、プラス・マイナス両面をみると、両義的である。それに対し印刷・新聞・雑誌と郵便――「インフォメーション」――については、人をして「聞見広くて勇生じ」、「活発にして進取敢行の気力に富む」にいたらせる変化をのべる。「内部の精神を動かして、智徳の有様をも一変」という変化はこの「インフォメーション」の作用にかかわるのであろう。その影響についての評価は、基本的に肯定的である。

西洋においてすでに実現した、「近時の文明」の「利器」の「功德」

を記述した上で福沢は、日本におけるそれについてのべ、ここでも文明の利器の影響は「雑誌、新聞、郵書」と鉄道・蒸気船・電信とに分けて検討される。彼は、その将来における影響を予測して、一言でいえば、「国の全面を翻して一場の都会に変じたるもの」がもたらされるであろうとする。それは人と物と情報のコミュニケーション・システムの拡大と統一に促された、情報化社会としてのネーションの形成といえよう。西洋における文明の利器の影響については、それが既にもたらした事実がのべられたのに対して、日本におけるそれについては、未発達であるがゆえにもっぱら「想像を以て今後の変化を押し量」ることをのべ、ただ変化が「意外に大にして……意外に広がる可」きことを強調する。「近時の文明」の先進国においても後発国においても結局、文明の利器の影響を予見することは「人智に及ばざること」なのである。

このような文明の利器は、開国によって西洋から日本に導入された。そのことは日本の国際関係と国内と両方の変化を意味する。このうち、開国——西欧国家体系への加入——は、文明の利器の影響による主権国家関係の激変という角度から、やがてとらえなおされる。『時事小言』がその始まりであり、「外交論」（一八八三年）では、「文明の利器其働を逞ふして各国の交際次第に劇を加ふ」とのべられるにいたる。しかしさしあたり、『民情一新』では、文明の利器が国民国家の内部にもたらす激動に考察が集中するのである。

第三章を通じて、「近時の文明」の利器の影響について福沢がのべる

ところは、全体として楽観的である。福沢はすでに『西洋事情』初編でも外編でも蒸気機関、蒸気船車とその発明について語り、初編の扉には蒸気船蒸気機関車の引く列車と電信線の絵とともに、「蒸気済人、電気傳信」という標語をにかけていた。第三章でもそれをうけて、「近時の文明」の利器が、人間の内面と社会関係と、両面におよぼす巨大な変化について、もっぱら好ましい面がのべられていたといえよう。そのトーンは第四章に入ると一変する。

近時文明の利益は保守派と改進黨とどちらを利するか、という問いで第四章は始まる。ただちに改進黨だと結論されるが、なぜそうであるかの説明は全くない。その上でこの保守派對改進黨における文明の利器の効用の対比は、政府對人民におけるそれに置き換えられる。ここで、政府と人民とはそれぞれの政治社会における機能上、本来的に保守的と改進黨的であるという、第二章の主題が再現する。第二章では、政府は、全体の統一的支配を行うがゆえに、支配は画一的であり秩序の現状維持であらざるをえないとした（「一定不変」）。それに加えて第四章では、政府はその役割上、多面的な現状を考慮するので慎重にならざるをえないとする。これに対して人民は、第二、四章を通じて「唯一方に進みて前後に顧る所あら」ずだとされる。『文明論之概略』第五章で尊王攘夷論を「単一の論」と評したのと同じ、判断の一面性と、そこから来る、政府に対してより急速な変化を求める傾向が人民についてのべられる（「直行急進」）。

福沢は、このような「一定不変」と「直行急進」という官民の本来

的な対立が「近時の文明」の「利器」の作用によって一層激しくなるという。これが第四章の、そして「緒言」に通じる、本書の大テーマであるが、その過程についての彼の説明は十分成り立つだろうか。福沢は「譬へば妄に名望高き学士論客が、一編の雑誌を発兌し、一場の演説会を開て新説を唱ることあれば、其説は忽ち社会の全面に流布して、一時に人心を動かし、熱心以て直に其方向に進まんとする人民の常態なれども……」とのべる。雑誌の発行、それと結びついた印刷、郵便、蒸気車という「近時の文明」の利器は、たしかに「新説」が社会の全面に流布するを助けるであろう。しかし「直に其方向に進まんとする」という判断の一面性と性急さの方は、この文明の「利器」とは直接には関係しない。このように説明は不十分であるが福沢は、政府と人民との、本来的な対立が十九世紀のコミュニケーションの発達と結びつくことによって全く新しい局面に入ったと主張するのである。

人民の側からの政府に対する不満の増大は、それに対する反動として、政府の側の「専政」を呼び起し、両者の循環が深刻化する。その赴くところ、「人民も政府も共に狼狽して方向に迷ふ者の如し」であるが、人民の反抗は、近代のテクノロジの発達を背にしているが故に政府の「専政」は、最終的には力を失うとされる。福沢は、このような趨勢の著しい例としてナポレオン三世のフランス帝国、ヴィルヘルム一世のドイツ帝国、ニコライ・アレキサンドル二世のロシア帝国の例をあげるが、注目に値するのは、これら諸国の「専制」がその後進性——「旧套」——からではなく、まさに十九世紀における新しいテク

ノロジーの発達によってもたらされた、新しい「専制」だとされることである。福沢は反抗と「専制」が循環する構造の例として、「一八七〇年英国刊行エカルド氏著の魯西亜近世史」すなわち Julius Eckardt, *Modern Russia*, 1870 のうち *Russia under Alexander II* の章、全文一七〇頁を参照する⁽⁴⁾。

この論文は、ニコライ帝(在位一八二五—五五年)からアレキサンドル二世の統治下の二一八七〇年にいたるロシア帝国の最近政治史であるが、福沢は『民情一新』を貫く彼の関心からして、この本における五十年近いロシア政治史の記述を大胆に再構成する。即ち、一方では皇室と貴族層との対立、官僚制・司法制度・地方行政の変革、農奴解放と農地改革、ポーランドを始めフィンランド・リトアニア等諸属領の独立運動といった、ロシア帝国の諸問題は全く省略される。他方、これに対して記述が集中するのは、体制批判勢力による新聞の刊行——それもゲルツェンの『コロコロ』と彼に対抗するカトコフの『ルスキー・ヴェストニク』にしばられる——とその巨大な影響力、それに動かされた「書生」・「書生党」——学生——と「有志者」、「自由党」(原文は *national democratic party*)、ゲルツェンら「社会党」の活発な運動と「ニヒリスト」による皇帝の暗殺未遂事件である。

福沢はこのような新しい「専制」の台頭という問題の指摘をもとにして、世界史の将来について大きな問題を提起する。「文明開化次第に進歩すれば、人々を皆道理に依頼して、社会は次第に静謐を致す可しとの説は、動もすれば学者の口吻に聞く所なれども、畢竟漠然たる妄

想にして、毫も証拠なきものなり。今の事物の進歩を見て、果して之を文明開化とすれば、其進歩するに際して社会の騷擾は却て益甚しかる可きのみ」。「蓋し今の世界の人類は常に理と情との間に彷徨して帰する所を知らず。之を要するに、細事は理に依頼して、大事は情に由て成るの風なれば、其情悔の波に乗せられて、非常の挙動に及ぶも亦、これを如何ともす可らず。唯人類に道理推究の資なきを悲しむのみ。然り而して其情悔の波を掲げたつもりを尋れば、千八百年代に発明工夫したる蒸気船車、電信、印刷、郵便の利器と云はざるを得ざるなり」。

「心波情悔、滔々」と「情悔の波」ということばには、そのまま現代の「情報化社会」を生き生きと表現するだけの真実感がある。しかしここでも福沢は、十九世紀のコミュニケーション革命がどのようにして「細事は理に依頼して、大事は情に由てなる」状態をもたらしただかについて、説明らしい説明を全くしていない。それにもかかわらずはつきりしているのは、文明の進歩は、理性の力の増大であり、社会は秩序に向って進むであろうという合理主義的樂觀的史観を、むしろ事実に対する「漠然たる妄想」として斥けたことである。それは明らかに『文明論之概略』に展開された、社会を支配する力における、徳↓智、私智↓公智への重心の相対的な移行、そして人間の知による人間関係の統御と秩序の実現という歴史の進歩の構想に対する、根本的な自己批判という意味をもっていた。

福沢はしかし、はそうに歴史の将来の暗い見通しを描いていな

がら、歴史のそのようなコースを不可避の必然とは考えず、人間の知性によって統御し回避出来ると考えていたように思われる。第五章では一転して、政府と人民との対立の激化という「時勢」にかかわらず、それによく対応して政治的安定を維持しえている英国の政治制度に注目する。政治的党派が「守旧」と「改新」とに分化していながら、どちらにも政権につく可能性を保障する制度、二大政党による議院内閣制と政権交替がそれである。福沢の英国議院内閣制の理解については、坂野潤治の前掲論文に詳しいが、ここで留意したいのは、福沢が英国の政治制度を紹介するに当って、それが機能するための重要な条件として、政治文化の役割を考慮に入れるのを忘れていないことである。すなわち、人民の政治的分化にもかかわらず、ひとしく王室を尊崇し、またいずれの党派も福沢が後に用いた概念で言えば「極端主義」を免れて互に他を受けいれる、——一言で言えば、政治文化における合意への傾向と理解したといえよう。

福沢は十九世紀文明の条件によく対応することが出来た英国の議院内閣制・政権交替の制度を紹介した上で再び、なぜそのような制度が必要とされるのか、「今の人類の心情」の問題にもとる。福沢は、一、旧を厭い新を喜ぶ心理。二、さまざまな社会的行為の中で、政権への参加に最も強い関心をもつという価値観。三、政権についた者に対する嫉妬、四、他者の不幸を喜ぶ心理をあげ、これらが「政府の変革を好むは世界普通の人情」をもたらしと結論する。福沢によれば、このような時間、空間の差異をこえて、人間に一般的な心理が、とりわけ

十九世紀文明の進歩によって強められるというのが、ここでも十九世紀のコミュニケーションの発達⁵が、なぜ、どのように十九世紀特有の「心情」を生み出すのかについての関係については、説明は全くない。むしろ「世界普通の人情」——時間・空間の差異をこえた人間心理を導入して説明しようとしたため、問題の十九世紀特有の様相はあいまいになっているといわざるをえない。

いずれにせよここから、時になかった政權交替こそが政治的安定を維持するための唯一の方法であり、ここでもそれは時間・空間の差異をこえて変らない普遍的真理だとされる。従って唐代の名臣の在職期についても、徳川幕府御老中御勝手方のそれについても、英国の首相のそれについても、同じ傾向が見出せるとし、特に幕政については、自ら調査した例証をあげる。英国の政權交替の制度も古くからのものであるが、それが十九世紀の現代において特にコミュニケーションの発達という状況のもとで、それに適応する上で、予期されなかった大きな効用を発揮したのだという。ここでも政權交替の制度と十九世紀固有の條件との関係はあいまいになっているといえよう。

福沢の結論は、十九世紀文明がもたらす政治的不満と不安定に対応するためには、英国型政治制度を採る以外にないという提言である。そしてこの場合注目にあたいるのは、議院内閣制と政權交替制採用の視点が、人間の心理に注目するきわめてプラグマティックで操作的な点である。福沢はこれに対して他の文章で(五でとりあげる「私権論」など)議會制を弁証する場合には、その根柢を人民の私権という福

沢にとつての最も基本的な価値から立論してその擁護のための代表と参加にもとめた。その発想はきわめて規範的だといえよう。しかしここでは議院内閣制と政權交替は、政治的不満の解消——いわば「ガス抜き」——の手段としてとらえられている。しかも福沢は、このような手段を以てしても政治的不満の原因を完全に除くことは不可能なことを認める。このような制度の機能は、政治的主張が「不平論にても、正論にても」それに実現の機会を与え、「政府の每一新に、不平の実を除くには非ざれども、之を瞞着して之を忘れしむる」ところに求められるのである。

以上のような「近時の文明」の考察にもとづく、当面の日本に対する福沢の提言は簡潔である。第一に国会開設尚早論に対する批判。福沢はかねて国会開設尚早論に批判的であった。しかし『民情一新』においてはその理由が変る。小論の『民情一新』『緒論』の検討ですでにふれたように、福沢は日本の知識人の西洋「盲信」をきびしく批判した。その「盲信」は、「近時」より前のマグナ・カルタ以来「緩慢至極の沿革」をモデルとして、漸進論の根柢とし、十九世紀の急激な変化を認識しえなかったのだった。第二に福沢は、近時文明の急激な變動に対応しうる政權交替の制度を提案する。二点はいずれも福沢の国会開設構想の大きな変化を意味していた。その内容については後にのべたい。

三

『民情一新』における「近時の文明」の認識は、『文明論之概略』に

おけるそれからどのように変化し、また連続していただろうか。第一に「文明」の概念自体が根本から再定義された。『文明論之概略』において「文明」は社会総体の智徳の進歩と定義されていた。しかもその中で市民革命を通じる国民国家の完成が決定的な画期をなしており、明治維新はイギリス革命・フランス革命と同志相においてとらえられている。『文明論之概略』において福沢の語彙には「近時」ということばはなかったが、国民国家の形成を近代の始点としてとらえていたといえよう。『民情一新』において「文明」は、十九世紀に始まる「近時の文明」としてとらえられており、その内実をなすのは産業革命がもたらした無機エネルギーによるコミュニケーションの革命的な発展である。

そのテクノロジーのとらえ方自体にも大きな変化が見られる。先のべたように、福沢は石炭エネルギーの発見とそれのコミュニケーションへの応用については、『文明論之概略』よりはるかに早くから一貫して強調していた。しかし『文明論之概略』においては外国の文明の受容において「外に見わるる事物」よりも「内に存する精神」が重視されていた。また蒸気機関や電信という装置よりもそれを創り出し使いこなした知性に関心が集中していた。さらに『概略』は、ほとんど全編がコミュニケーションの問題をめぐっていたが、その場合のコミュニケーションは「議論」すなわち、対面関係における双方向的な話しことばによるコミュニケーションであった。これに対して『民情一新』においては、「近時の文明」の『文明論之概略』中の用語によれ

ば「外形」「有形の物」に属する、「利器」が、「人類肉体の禍福のみならず、其内部の精神を動かし」ているという事実注目する。『民情一新』の「補遺」の意味をもつ草稿ではさらに、「近時の文明は有形の事物を以て無形の心情を顛覆したるものと言うて可ならん」と言い切っている。力点の移動は明らかである。また一八八三年(明治十六年)四月、『時事新報』に載せられた論説五編(一六日「西洋諸国の文明は其實物に就て之を見よ」、一七日「文明開化の進歩は次第に其速力を増す」、一九日「人事は有形の文明に由て左右す可し」、二〇日「文明の利器果して廃す可きや」、二二日「政治の熱心を誘導する其法なきに非ず」)は一つのシリーズとして『民情一新』を展開することを意図しているが、その中心をなす一編は『民情一新』第四章を引いて論じ「人事は有形の文明に由て左右す可し」と題されている(『福沢諭吉全集』第八卷、六〇二―六〇五頁。以下八・六〇二―六〇五のように略記する)。一八八八(明治二十二年)の『時事新報』論説三編(三月二・三日「文明の利器に私なきや」、三月二五日「志士を処するの法」、同二六日「官立公立学校の利害」)も同じく『民情一新』の命題の具体化を意図しているがそこでも「今日の改進は寧ろ有形文明の利器の功なりと信ずるなり」と論じられている(「文明の利器に私なきや」一一・四五二)。このような力点の移動は定着したものといえよう。ここでは、文明の利器を創り、また使いこなす知性よりは、「利器」＝テクノロジーの装置が人間関係を変化させる面に関心が集中している。

第三に、そのような「利器」によって動かされる「近時の文明」の

将来についての評価も変化する。すでに見たように『民情一新』第四章では、人間関係における「道理」の優位が社会の秩序を進めるであろうという、『文明論之概略』にも一貫するオプティミズムがはっきりと批判され、逆に「文明」の発達につれ「騷擾」が増大するという暗いベシミズムがのべられていた。けれどもそれに先立つ第三章はコミュニケーションの効果について「聞見博くして勇生ず」という、『文明論之概略』に通じるオプティミズムが示されていたこともすでに見た。また『民情一新』補遺では、「門閥専制」が力をふるったのは、コミュニケーションの不便に支えられていたのを、コミュニケーションの発達が掘り崩し、民権の急速な発達を促進するという樂觀的な予測をのべている。⁽⁷⁾ 文明の将来についての見通しは、ベシミズムとオプティミズムが交錯して両義的になった、もしくは、一方では人間の非合理的な感情の増大と秩序の解体という危機感を抱きながら、他方根本においては、それにもかかわらず、そのような危機に人間は対応せざるをえない、またそれを取り切ることが出来るという人間の力に対する信頼とオプティミズムが、変わらず続いていたということも出来る。

これに対して急激に変化したのは、政治制度の構想である。『民情一新』の姉妹編というべき『国会論』の「第八」では、政治制度の構想を大中に修正した事情をはっきりと公けにしていた。国会は官吏を除く人民からの選挙によって、政府は選挙によらぬ官吏によって構成し、国会と政府との間に「権力の平均を保護する」(「分権論」)制度を主張

して来たのを、議院内閣制に改めたのである。ここにのべる政府と国会の「権力の平均」という構想は、『分権論』(一八七六(明治九)年執筆、七七年刊行)で初めて明確な形に打ち出され、『通俗民権論』(一八七六(明治十一)年)にうけつがれたものであった。議院内閣制という構想自体がそれまでに対して大巾な変化であるばかりでなく、さらに、国会開設を至急に行うという点でもこの構想はそれまでから大きく変っていた。『文明論之概略』でも『分権論』でも、福沢は国会開設尚早論を批判し、直ちに国会開設の準備を始めることを主張していた。しかしその場合国会開設の準備は、第一義的には地方民会などでの訓練によって議会政を支える政治文化を創り出すことを意味した。直ちに準備を始めるという主張は、このような政治的訓練と政治文化の創出という準備は、相応の時間を必要とするという認識と結びついていた。⁽⁸⁾ それが『民情一新』『国会論』においては、政治文化としての「衆論」の創出という準備は考慮せず、直ちに国会を開設することが主張されていた。国会開設についての、即時断行の主張はより徹底したのである。

けれども、ここにのべたことからもうかがわれるように、『民情一新』の議論の中には、『文明論之概略』から一貫して変らない思想が見られた。『民情一新』第一章は「保守主義と進取の主義とは常に相対峙して、其際に自ら進歩を見る可し」と題され、これを受けて、「此両極の主義は……各其勦を顕はし、又各一時に其勦を逞ふすること能はずして、相互に軋轢し、其軋轢鍊磨の際に、些少の進歩を見るものなり。

若し両極の働、其平均を得ずして一方に偏し、天下の事物、頑固に停滞して動かざる、若しくは遽に進動して止る所を忘るときは、大に人類の不幸を致すことあり」と書き出されていた。これは「権力の偏重」に対して「文明の自由は他の自由を費して買うべきものにあらず。諸の権を許し、諸の利益を得せしめ、諸の意見を容れ、諸の力を逞うせしめ、彼我平均の間に在するのみ」と説いた『文明論之概略』の基本哲学に通じるものといえよう。福沢によれば「進取は積極の働……保守は消極の働き」であり、「実の利益は積極に在て、此利益を取るの法を緩和し又制節するは消極の働」であつた。「進取」が原動力であつて、その働きは、いかに強い「保守の力」の「過強」といへどもとどめることは出来ないのである。

このような「進歩」観を理解した上で『民情一新』の議論を見ればそこで、「進取」の「偏重」から生じる「遽に進動して止まる所を忘るる」過激として警戒される「書生」の「民権論」に対する態度が、『文明論之概略』における「公の心を以て単一の論を唱」るがゆえに「その勢必ず強盛」だとする、攘夷論に対するそれと似ていることが浮かび上つて来る。一方では攘夷論を、他方では「書生」の「民権論」を、複数の運動の「平均」の中に誘導し、国民国家の形成と維持の中に統合することが大きな課題とされているように思われる。事実『通俗民権論』第二編原稿」は攘夷論と民権論とをともに「門閥論」に対する批判としてとらえて、その役割に高い評価を与えているのである（一九・三五六―三五九）。

四

福沢が「近時の文明」の展望をこのように修正するに当って、彼は『民情一新』執筆に当って参照し、その中に長文の引用をしている西欧の書物から、どのような示唆を受けたのだろうか。福沢の重要な意味をもつ著作は、これまでしばしば、政治状況が大きく展開する中で欧米のすぐれた書物に出あい、日本の当面の政治状況と欧米の書物とをいわばつきあわせて読み抜き、そこから日本の将来について大きな視野で構想した所産であつた。維新直後の政治的・思想的混乱の中でバツクルやギゾーを読み抜いてえた国民国家形成の構想が、『文明論之概略』に結実したし、西南戦争直前の士族の不满と反抗に直面する中で、トクビルの『アメリカのデモクラシー』と取りくんだ成果が、「分権論」であつた。『民情一新』より後の「帝室論」とバジヨットの『英国憲政論』との関係についても同じことがいえる。『民情一新』の場合はどうであらうか。

『民情一新』には、すでに見たように、G・ウェークフィールドの『植民論』とJ・エッカートの『近代ロシア』とからかなり長い引用がされている。しかし、福沢がこの二冊をどうして知ったのか、何故この二冊を読んだかはよくわからない。福沢は、『文明論之概略』にもうかがわれるように、植民の問題に早くから関心を抱いていたから、英国において植民論の古典としてよく知られた、ウェークフィールドの書物を知って読むのは自然だったろう。しかし福沢自身がのべるよう

に、『植民論』の中で「下民」(common people)や「役夫」(labourers)の不満とチャーティズムやソシャリズムの台頭についてのべられるは、たかだか二―三頁でしかない。逆に福沢がそこを見逃さなかったあるいは、そこからだけ引用したのは、福沢がこの問題について強い関心を抱いたことを示すといえよう。福沢がなぜエッカートのロシア近代史に注目したのかについては、全く手がかりがえられない。ただ云えるのは、この本を通してえられた福沢の帝政ロシアの現代史理解が同時代の日本において拔群に深いものだったこと、およびこの本をとらえる彼の関心が『植民論』の場合と共通して、きわめて明確に焦点を結んでいたことである。

福沢の両著の理解に共通する関心は、第一に、「近時の文明」『十九世紀の文明が社会に不満と反抗をもたらすという深刻な現実である。それは『植民論』においては「下民」や「役夫」のチャーティズムと社会主義として現われ、福沢の英国民における「ストライキ」やフランスその他の諸国の「社会党」(原文 socialism この当時はふつう「社会党」と訳された)への関心と結びついた。『近代ロシア』においては、福沢の関心の焦点は「書生」や「学生」の「社会党」「虚無党」、そして皇帝へのテロであった。

関心の第二は、このような不満と反抗の原因としての、十九世紀のテクノロジの問題である。ただ二つの書物それ自体では、両方とも、「近時の文明」の「利器」の問題は、それほど大きな意味をもっていない。『植民論』の中の福沢が引用する部分は、「役夫」や「貧賤」の

不満を問題にするが、貧困の原因として近代産業を考える視点はない。『近代ロシア』は、ゲルツェンら「社会党」の影響の急激な拡大との関連でコミュニケーションの問題にふれるが、そこで扱われるのは、もっぱら知識人サークルの中に流通した雑誌に限られている。これら二著が『民情一新』の成立において果たした役割は、なによりも十九世紀文明における不満と反抗の劇的な増大という見通しであり、その原因をなすコミュニケーション手段の機能の指摘であるが、後者は、前者に比べればごく附随的だといえよう。そうだとすれば、これら二著に促されて、『民情一新』を完成するには、福沢自身の経験と思案との比重が相当に大きかったといわねばならないだろう。福沢の『民情一新』以後の著作はその点についての手がかりを与える。

福沢は、蒸気船車・電信・印刷・郵便の社会的影響の予測は、一般的に、「人智及ばざることなり」とした上で、それらが未発達な日本において、それらが発展した将来における社会的影響については「想像を以て推し量」るほかないとする。そのような想像が向けられたのは何よりも貧困にともなう不満と反抗であった。たとえば前掲の「志士を処するの法」(『時事新報』社説、一八八七(明治二十)年三月二五日、一一・四六四―四六六)では、西欧における「多勢の貧民群衆」た「デモンストレーション(表意集会とも訳すべし)」を始めとする「下等社会の貧民が一揆徒党の沙汰」や、その中に混れこむ「社会党」「共産党」の動きに注目した。問題は日本における見通しである。この点について福沢は、経済発展のおくため、「当分の処には日本の貧

民が一揆徒党して政治の妨を為す可きやの心配は先ず以て無用なる可し」という判断をのべる。

けれども他方、現在の日本には、ヨーロッパの貧民、社会党・共産党に対応する社会層が存在する。それは、「書生」とりわけ「学資もなく目的もなく漫然不可思議の間に衣食する者」、多くは「旧藩士族の子弟」で、「彼の志士又壮士など称する者」もこの層から出るとされる。

このような見方は、これ以降の福沢の政治論の基調をなすにいたるのであり、ここに現れる「書生」「志士又壮士など称する者」が、『民情一新』で注目される、「居家を定めざる書生」(第三章)や「全国の士族」(第五章)に通じることは明らかであろう。このような「書生」や「士族」の「民権論」が、ヨーロッパ社会において文明の将来の鍵をにぎる「役夫」や「下民」の「社会党」「共産党」に対応して、日本の当面を決定する鍵となる社会層としてとらえられたのであり、この社会層の不満の爆発を未然に予防することが大きな政治的課題として登場したのである。『民情一新』がそのような課題に対して提出したのが議院内閣制と政権交替の早急な実施であった。

それでは、日本における「書生」や「士族」の運動と、それを動かした「近時の文明」の「利器」についての福沢のどのような経験が、『民情一新』執筆の背景にあったのだろうか。福沢自身の説明はないが、『民情一新』『国会論』において、政治制度の構想に大きな修正をするまでの、『分権論』から『通俗民権論』にいたる執筆・刊行の状況、および執筆の意図とその効果を検討することによって、いくらか

の手がかりがえられるであろう。福沢が『分権論』を執筆したのは、一八七六(明治九)年十一月から二月の間、その目的は相次ぐ士族反乱を経験して、「永遠を謀る(——「推考の愛国心を永遠に養ふ」)の外に、又焦眉の急として士族有志の輩を処置するの要務」に応じるためであり、「田舎の士族」に対する新聞の煽動力についても注意を払っていた。福沢が力を注いで執筆したにもかかわらず、政府の言論弾圧を考慮してこの論文の刊行を見あわせているうちに西南戦争が勃発し、既に出て来た上つていた草稿をようやく刊行したのは西南戦争の終結の翌々月、一八七七(明治十)年十一月であった。福沢はその頃に記した「覚え書」で、「如何なる頑固士族、封建党の極度と称する者にても、遂には我輩に降参するに相違なし。唯政府の俗吏が出版新聞の法などを作て一時の停滞を致すのみ。薩摩の乱の如きも之を三、四年前に注意して自由自在に擾攪すれば、余輩一本の一年を以て幾万の兵を未発に防ぐ可き筈なりき。俗吏の為す禍も随分大なるものなり」とのべた。福沢の自己の言論の力への絶大な自信と、それを妨まれた無念の思いが全文に滲み出している感がある。

翌一八七八(明治十一)年四月、福沢は『通俗民権論』の執筆を始め、六月には脱稿した。福沢の執筆開始より少しおくれて四月末から、立志社の有志たちは西日本一帯に愛国社再興の大規模な遊説を展開した。これに対して、九月に入つて刊行された福沢『通俗民権論』は、『分権論』の主張をさらに徹底させ、「地方の民会を後にして中央の国会を先にせんとする」政策に対する批判を強く打ち出していた。それは愛国

社の路線に対する明白な対決を意味した。けれども政治状況の展開は、福沢の意図に反した。一八七九(明治十二)年三月に始まった全国各地の府県会開設は、福沢の主張に沿うものだったが、愛国社を中心とする民権運動の主流は、地方民会での活動をステップにして国会開設に迫るというよりは、一挙に国会開設を目ざそうとしていた。この年三月の愛国社第二大会には、その勢があらわれていた。福沢は、おそらくともこの頃までにはウエイクフィールドの『植民論』とエッカートの『近代ロシア』を読んでおり、病氣と偽って時間をひねり出し、『民情一新』の執筆にかかったのは、この後五月からであった。福沢が土族反乱から土族民権まで一貫して土族の動向を、政治状況の決定的な要因としてとらえ、これを誘導するのに力を注いでいたこと、その武器としての言論の力に大きな自信をもっていたことがうかがわれる。しかもそのような福沢の活動は挫折し、彼はそれまで、意図した政治制度の構想を放棄し、政治路線を大幅に修正せざるをえなかった。

福沢が『植民論』と『近代ロシア』に出あったのはこのさ中においてであった。二つの書物を通して、福沢はおそらく日本における土族・書生の動きと、ヨーロッパにおける社会党・虚無党や「労役者」の運動とを重ねあわせて考え、土族・書生の運動を「近時の文明」の世界史の相の下でとらえ、それに対する先制的な対応を構想するにいたっただろう。彼はまた、このような運動を組織する武器としてのコミュニケーションの手段とりわけ新聞の意味を再確認したであろう。福沢はそれまで、重要な主張は、小さくとも書物を書き下すことに

よって行ってきた。しかし新聞の役割について本格的に考えるようになったのはこの頃からのように思われる、『民情一新』を受ける『国会論』が『郵便報知新聞』紙上に七月二十八日から八月十四日まで十一回、八月十八日の「国会論に就て大方の教を乞う」まで含めれば十二回にわたって連載されたのは、その一つの現れといえよう。このような構想が背景にあつて、やがて政府側からの新聞発行の計画をもちかけられると積極的に応じ、これが挫折すると、自ら『時事新報』刊行にふみ切る(一八八二(明治十五)年三月一日)にいたるのである。

五

こうして、土族・書生の民権運動の展開に、「十数年の未来を臆測して」先制的・予防的な対応をはかる具体的構想としてうち出されたのが、『民情一新』で示唆され『国会論』で具体化された議院内閣制と政權交替であった。福沢の官民調和論の着想の事情とその時期については、福沢自身の回想的な説明も一義的ではなく、研究者の理解も分かれているが、文明論的な世界史の理解の変化と関連している面を重視するなら、『民情一新』および『国会論』と『国会論・後編』の性格をもった『時事小言』をもって、官民調和論の形成ととらえることが出来るだろう。だがわずか四年前の『文明論之概略』における、「文明」の世界史の相のもとにおける国民国家形成の構想に比べると、『民情一新』における文明の世界史の修正とそれと結びついた国民国家統合の構想には、ある種の早急さと未完性を感じられる。

『文明論之概略』もいうまでもなく、国民国家の形成が困難に直面するという状況をふまえて著された。しかしそこに出された国民国家形成の構想は、個々の政治的出来事をこえた、スケールの大きなものであった。福沢はそのため一年以上諸事を投げうって、この本の執筆に専念した。「今、国に事あれば、その事の鋒先に当て即時に可否を決するは政府の任なれども、平生世上の形成を察して将来の用意を為し、あるいはその事を来たしあるいはこれを未然に防ぐは学者の職分なり」(『文明論之概略』第四章)。「文明論之概略」執筆当時の福沢は、知識人の固有の任務としての、世界史の理解にもとづく長期の構想について、満々たる自身をもつて語っていた。

『民情一新』の場合は、これとかなり様子を異にする。スケールの大きい堅固な文明史・世界史を構想するという企てが、始めからあったというよりは、これまでに見たように具体的な政治的出来事の衝撃に迫られ、その中で外国の書物と出会い、その結果、そのような出来事の世界史的な意味を考えるよう促されたのだといえよう。しかも先進の西洋諸国でも、「文明の利器」がもたらす結果について「狼狽」し「朝野共に未だ其方向を得ざるや明なり」だという。日本についてはなおのこと「想像を以て今後の変化を推し量」り、「唯十数年の未来を憶測」するほかはない。『文明論之概略』からわずか四年の後、福沢の世界史の将来についての見方は、世界史の変化の急激さに衝撃を受け、予測の可能性についてより控え目になったように思われる。しかも福沢は、『民情一新』におけるこのような将来構想を考えるのにも、四年

前『文明論之概略』を執筆した時ほどに時間を割いて集中することは出来なかった。今日残されている福沢の書面によれば『民情一新』の脱稿は一八七九(明治十二年七月八日、それまで三十数日、仮病をつかって執筆に集中することが出来たとどまった。⁹⁾『文明論之概略』執筆の際とは事情が大きく変っていた。

わずか四年前『文明論之概略』を執筆したおりの福沢は、世界史の将来を予見し、それによって世論と政府を指導するという自己の知識人としての任務について、自信を以て語っていた。しかし『分権論』『通俗民権論』から『民情一新』にかけての執筆状況をかえりみれば、急速な歴史の展開が、いわば福沢を追いかけて迫っているのに対し、福沢は将来の予測可能性についてより慎重あるいは悲観的になっていることがうかがわれる。そして歴史の展開が急速になる中で福沢はかつて『文明論之概略』執筆のために一年以上を割くことが出来たのに対し、『民情一新』のためには一ヶ月余り集中することが出来たにすぎなかった。この点についてもまた福沢がコミットした歴史の展開の速度が早まり、福沢にもはや多くの余裕を与えなくなったと云うことが出来よう。これ以後福沢の公にされた著作は、最晩年の『福翁自伝』や『福翁百話』『百余話』を別とすれば、ほとんどが、新聞に載せられたものか、連載をまとめたものになるのである。

このような事情は、福沢が『民情一新』に力をこめ、米国留学中の子、一太郎・捨次郎兄弟に英訳の上米国で出版することを提案するほど、この小さい書物に自信を抱いていたにもかかわらず、『民情一新』

をさまざまな意味で未完の問題提起にとどめた。『民情一新』において福沢が提出した問題は、「文明」史の原理論の次元でも、同時代に対する政治構想の次元でも十分に検討されていなかったり、その後の著作をまわって、おりにふれてさらに展開されているものが多いのである。

『民情一新』とそれを承けた『国会論』に展開される、議院内閣制と政權交替という政治制度の構想が、官民調和論の中心をなすことは、大方にあまり異存はないだろう。しかしそのことは、このような政治制度の構想が官民調和論の全てであることを意味しない。『民情一新』の三年後に書いた「時勢問答」(『時事新報』社説、一八八二明治十五年六月二十三日—七月八日、八・一八〇—二〇四頁)は、ロシア・ドイツのみならず、英・米にもいちじるしくなった「官民軋轢」をいかにして「和」しうるかという問題をとりあげる。福沢は、『民情一新』の四、五章から長文の引用を行った上で、人民のうちの「政府を羨むの念を断たしむるに在り」という答えを出す。しかし、「今の政治の熱世界に於て天下の人民をして政府の地位を羨むの念を断たしめんとするは到底能くす可きに非」ず。「これを正面より制止せんとするも固より人力の能く可き所にあらざれば」、「唯其政治の念を分て一向一心ならしめざるの法を求め」、「唯其心事を転じて方向を多端ならしむること緊要なるのみ」とされた。

その方法はどこに求められたか。福沢によれば、人民が政府を羨むのも、政治熱も、日本のみならず、西洋諸国にも共通の現象である。英米と日本とのちがいは、英米においては政治が社会全領域の一部を

占めるに過ぎず、宗教・学問・経済・産業など諸分野が「繁多」に分化し、政治社会に拮抗して人民の関心をひきつけている所にある。とすれば、日本においてとる可き方策も明らかである。「文明の勢に乗じて益社会の組織を盛大にし、文学技芸なり、商売工業なり、之を進めて政治社会外に独立せしめ、以て志士安身の区域を広くするのみ」。しかし日本では、人民の資力が貧困でこれら諸文化領域の自立した発展が困難である。そこで福沢が目したのは帝室の機能であり、帝室がこれら文化領域での活動を奨励して「天下の学士を籠絡し、文学技芸の別世界を開くの一事」に期待を懸けた。それは、福沢がこの論説の直前「帝室論」で主張した帝室の役割をうけていた。先にあげた、一八九三年(明治十六)年四月の一連の論説の結論をなす「政治の熱心を誘導する其怯なきに非ず」も、「政治以外に名の源を開」いて、「学者書生」の政治熱を「誘導」することを説いていた。

これは政治制度論というよりは、その前提をなす文化ないし価値体系の改革論といえよう。この論説は全体として、「心事」と「働」との「単一」から「繁多」へ、「権力の偏重」から「文明の自由」へという、『文明論之概略』における歴史の像を反映していた。

注目に値するのは、このような「政治社外」に「志士安身の区域を広くする」という文化の改革の議論が、それに連動する議会論を伴っていたことである。たとえば、「私権論」(『時事新報』論説、一八八七(明治二十)年十月六、八、十、十一、十二日)。「人民の私権を堅固にするは立國の大本にして、之に政權を得せしむるは第二の要なり」と云

はざるを得ず。抑も國民が政權に參與して然る可しとの道理をのべんに、……一國社會に政府を立るは、其群を成したる人民の便利の爲めにこそしたるものなれば、其便不便に付ては本人たる人民の當さに嘴を容る可き筈なりとて、扱は人民代議の論も起り、凡そ國法を議定するの権柄は獨り少数の人に任す可きにあらずとして、國會なるものを作り、人民の集まりて法を議し法を作ることあり、即ち政權に參與するものなり。……例へば國民が政府の下に立て其法律の命ずる所に従ひ又納税の義務を負担するは、主治者に支配せらるるものなれども、其法律と云ひ又納税の法と云ひ、最前これを議定するときには人民も其議に参り、自分の満足する所にて定めたるものなれば、取りも直さず自分の法を以て自分を支配し、自分の思ふ所を以て自分に命ずるに異ならず。是れ立憲代議政体の大主義なり。然るに今國中に私權の基礎固からずして、人民は自から其身の位を重んずるを知らず。……今の日本國人は政權の事を喋々して参政云々の論に熱するよりも、近く一身の私權を衛るの工夫こそ肝要なる可し。……私權は内なり、政權は外なり。我輩は先ず内の自衛を強固にして、然る後に外に勤めんと欲する者なり。……西洋諸國の人民は、既に己に自身の位の重きを知り、其身に属する私權の大切なるを悟り、其自衛の爲めに遂に政權の部内に入らんことを求めたるものなれども、我日本國に於ては未だ私權論の發達を見ずして、俄に政權論の盛なるを得たり。……」。ここに「政權の事を喋々して参政云々の論に熱するよりも、近く一身の私權を衛るの工夫こそ肝要なる可し」という一節が、「時勢問答」における

「政府の地位を羨むの念」を「政治社外」に誘導するという議論に連続することは明らかであろう。

この「私權論」の議論がまた『文明論之概略』の基本的な主張をうけていることもまた明瞭である。『概略』第九章では「英仏その他の國々において中等の人民、次第に富を致して、随てまたその品行を高くし、議院等にありて論說の喧しきものあるも、ただ政府の權を争うて小民を压制するの力を貪らんとするにあらず、自ら自分の地位の利を全うして、他人の压制を压制せんがためる勉強するの趣意のみ」とのべられていた。

「私權論」の「未だ私權論の發達を見ずして、俄に政權論の盛なる」に対する批判は、『概略』の「ただ政府の權を争ふて小民を压制するの力を貪らんとす」るのに対する批判を受け、「時勢問答」の「政府の地位を羨むの念」への批判と共通していることがわかれよう。そして、「私權論」における「自ら其身の位を重んじ」「近く一身の私權を得る」態度のすすめが、『概略』における「自ら自分の地位の利を全う」する営みのすすめに通じること明らかであろう。『文明論之概略』の比喻をかりれば、「政府の地位を羨の念」の亢進に対して、政權参加の門戸を開いて、いわばガス抜きをはかる、『民情一新』・『国会論』の議院内閣制・政權交替は、政府が行う「外科の術」であり、いわば対症療法だといえよう。それに対し、「時勢問答」以下にのべられた文化の改革は、「学者」がとり組むべき社会の基礎的な体質改善、「養生の法」だったといえる。そして「私權論」でのべられる議會論

は、「時勢問答」で説かれるような政治文化の改革をまっぴら成り立ちうる。『民情一新』・『国会論』に展開された議院内閣制が、J・S・ミルのことばをかりれば「他の人々の上に権力をふるいたいという欲望」に対応するとすれば、「私権論」のそれは、ミルの「自分自身の上に権力をふるわれるのを嫌う気持」を前提にしていたといえよう。⁽¹⁰⁾ 制度としては、同じ議院内閣制であってもそれが前提する政治文化はほとんど対蹠的である。福沢は、『民情一新』・『国会論』的な「外科の術」によって士族民権的な政権熱にガス抜きをはかりつつ、いずれは「私権論」におけるような、私権の自己防衛の制度としての議会へ変化させることを意図したのではなからうか。福沢は、この領域での改革論をその後も一貫して進めていた。官民調和論は、このような意味で議会制という制度論から、政治以前の領域、文化の領域にまでわたるものであり、官民調和論における議会制論も一義的ではなかったといえよう。こうして問題は自ら『民情一新』における「文明」論の次元に連なっている。

既に見たように『民情一新』において福沢は、『文明論之概略』の中心命題に、大胆な修正を企てた。『文明論之概略』では、人間の知性が「恐怖」、「依頼」、「嫉妬」、「惑溺」といった感情を克服してゆく過程が文明であった。歴史の将来は基本的に智の勝利のプロセスであった。『民情一新』ではこれが大きく修正される。「近時の文明」の「利器」が社会的「不平」と「官民の軋轢」といった不満の感情を激化するというパラドクス、「利器」の社会的効果が「利器」を発明し実用に供し

た者の制御をこえて暴走し「狼狽」をもたらすというアイロニーの、暗い見通しが示される。けれどもそれと併行して福沢は、文明の「利器」は、これとは逆に「聞見博くして勇生ず」、すなわち智が勇気を生み出すという『文明論之概略』の基本的な命題をさらに発展させる、明るい展望をも描き出す。以上をとりあげただけでも『民情一新』における文明論は『文明論之概略』のそれからの連続ないし発展と根本的な変化との両方向を示すアンビバレントなものだったといえよう。

加えて、『文明論之概略』の文明論を修正する、十九世紀のテクノロジの効果についての驚くべく早い鋭い認識も、直観的な洞察にとどまっていた、そのような状況が発生する過程についての分析はほとんど見られない。「心波情海、滔々」、あるいは「国の全面を翻して一場の都会に变じ」といったキイ・コンセプトは、いかにも福沢らしく鋭い洞察と卓抜な表現能力を示している。そこには、近代産業文明を迎えようとする日本において、早くも近代後期の問題を見通しているおもむきさえある。しかし、すでに見たように、このような新しい状況がどのようにしてもたらされるのか。とりわけ、産業革命後のコミュニケーション革命との関連については、具体的な分析はほとんど無い。⁽¹¹⁾

『民情一新』の文明論におけるこのような両義性と未完性とは、『民情一新』とそれに続く一連の政治論にも関連する。先にのべたように小論では『民情一新』の文明論の次元における変化に注目し、これに起因する政治論の新しい展開を福沢の官民調和論としてとらえること

にした。そのようにとらえた場合に、『民情一新』における文明論の大きな修正と直接に結びつく、議院内閣制と政権交替の構想が官民調和論の中心をなすことは明らかであろう。しかしながらそれは、すでに見たように、政権熱の亢進に対するいわば対症療法として構想されており、政治文化の改革による、より長期的かつ基本的な対応をまつものであった。後者が『文明論之概略』から連続している文明論に基礎をおいていることも先に見た通りである。また『民情一新』以降の議会論においても、私権の擁護を忘れた政権熱の亢進へのガス抜きのな対応という構想と併行して、私権の擁護のための政治参加という、『文明論之概略』以来一貫した文明論に根ざした議会論が見られた。この面でも官民調和論における政治制度の構想は、それほど単純ではなく、多義的あるいは重層的だといえよう。

以上小論では、『民情一新』とそれに結びつく一連の著作を手がかりに『民情一新』における文明論の新しい展開と、政治論の転換について検討した。このような検討は、一八八〇年代以降の福沢の政治構想と文明論の理解のためにどれだけ意味があるだろうか。八〇年代以降の政治論・文明論の分析を進める中で、あわせて『民情一新』についても再考することが、次の課題である。

注

- (1) はじめ、『民情一新』・『旧藩情』と『福沢全集緒言』とを合せた選文集(常松書房、一九四七年)の解題として執筆され、改稿の上雑誌『新文明』

(一九六二年)に掲載。小泉はその後、『民情一新』に引かれる「一八七〇年英国刊行エカルド氏著の魯西亜近世史」の同定を行って「発見」(『新文明』一九六二年十二月)『発見』のつづき(同、一九六三年三月)を書いた。三篇とも『小泉信三全集』第十九卷(文芸春秋社、一九六八年)に収録。なお『福澤諭吉』(岩波新書、一九六六年、『小泉信三全集』第二二巻に収録)の第四章「福澤の歴史観」も、前記論文「福澤諭吉の歴史観」を補う。

- (2) 坂野「政治的自由主義の挫折」(『岩波講座日本通史』第一七巻(岩波書店、一九九四年)、なお、同著者の「総論」(『シリーズ日本近現代史』2(岩波書店、一九九三年)をも参照。伊藤「明治十四年の政変と『人心』教導構想」(上・下)『同志社法学』一四八号(一九七七年九月)、一三六号(一九九四年五月)。

- (3) 正式なタイトルは *A View of the Art of Colonization, with Present Reference to the British Empire; in Letters between a statesman and a Colonist, edited by (one of the writers) Edward Gibbon Wakefield* (London: John W. Parker, 1849)。「民情一新」に引かれるのは「Colonist」からの第二二書簡、六七頁。

- (4) くわしくは「Modern Russia: Comprising Russia under Alexander II. Russian Communism. The Greek Orthodox church and its Sects. The Baltic Provinces of Russia. By Dr. Julius Eckardt. (London: Smith, Elder & Co., 15, Waterloo Place, 1870)」。前記のサブタイトルが示すように四つの論文からなる三百数ページの書物であるが、福沢が参照したのは第一論文である。

- (5) 唐代名臣については、唐書によったのであろう。また幕府諸老中諸勝手方の在職については自ら調べた資料が残っており、その間に挿入された別紙には、五代や明朝の事例について調べたメモがあり、全集第二十一巻に収められている。

- (6) 一九・二六三頁。この草稿の性質については次注を参照。

- (7) 「『民情一新』補遺」一九・二六三頁。ちなみにこの無題の草稿断片は、文中に「本編の旨を全ふして兼て又一新論の補遺に供するのみ」とあることから「『民情一新』補遺」として扱われており、「此事は本年八月発兌したる拙著民情一新に記したれば」という一節もある。しかし「本編の旨を全ふして」の「本論」とは、前年刊行した『通俗民権論』をさし、この

草稿はこれに対する第二編を意図していたのではないかと思われる。この他に『通俗民権論』第二編原稿」と仮に題される断片が一九・二五三―二五九頁にあるが、両編はキイワードや論旨で通じるようである。この点なお、『福沢諭吉全集』第四巻六九二頁の『通俗民権論』の解題をも参照。『民情一新』をうける両編には、コミュニケーションの発達が民権を発展させるというオプティズムと民権運動への支持がはつきり示されており、『民情一新』が含む現実政治に対する政策を理解する手がかりになると思われる。

- (8) たとえば『貧富論』(『時事新報』一八九一(明治二十四)年社説四月二十七日―五月二十一日社説。貧富の「衝突破裂」の見通しについて「貧富相対し、直接に接して、苦痛を感じる者は、実業家の貧なる者……なれども、破裂の端を発する者は工商ならずして、却て直接の關係なき士族書生の流より事端を開くことならんと予期せざるを得ず」とする。さまざまな政治経済問題について活動するのは利害關係を有する当事者ではなくて、「財産もなく土地もなく唯一片の志を所有する人物」であるという「主客を異にして運動する近日の様」を福沢は問題にするのである。

- (9) 野手一郎宛一八七九(明治十二)年七月二十日付、猪飼麻次郎宛同年八月一日付、原時行宛同年八月二十五日付、奥平每次郎宛同年八月二十八日付、各書簡(一七巻)、および『民情一新稿成』と題する七言絶句とその解説(二〇巻)を参照。

- (10) J. S. Mill, *Considerations on Representative Government* (Everyman's Library), p. 213. 山下重一訳『代議政治論』(『世界の名著 三八 ベンサム・J・S・ミル』中央公論社、一九六七年)三九九頁。福沢の「人民の領分を広めんとするに非ずして、政府の権を分て共に弄ばんと欲するに過ぎ」ざる「今の民撰議院論」に対する批判と、それが福沢が読んだ『代議政治論』の本文に引いた一節とは關係があるのではないという推測について、拙稿「公議輿論と討論のあいだ」『福沢諭吉年鑑』一九(一九九二年)参照。

- (11) たとえば「今の世界の人数は、常に理と情との間に彷徨して帰する所を知らず……細事は理に依頼して、大事は情に由て成るの風なれば其情海の波に乗ぜられて、非常の挙動に及ぶも……」といった人間の行動にお

ける感情の役割の重視は、バジヨットの著作における下層階級の行動の非合理性の強調に接して共感し、さらに深められなかっただろうか。福沢が『帝室論』執筆に当ってバジヨットの『英国憲政論』に示唆されたことはよく知られている。福沢がこの論説の中で直接に参照しているのは、バジヨットの王室の尊嚴的部分としての効用である。福沢は明示的には論及していないが、バジヨットの王室の尊嚴的部分としての役割への注目の背景には、下層階級の非合理性についてのさめた認識があったのである。